

(封箋表文)「天正侯様御書物、民野より差出候由にて、  
八兵衛・直人より相渡、則納戸へ為仕廻様様ニ申付候一  
封」

(封筒裏書)「封 安永八己亥九月十五日」

此封のまゝにて、高野御あつかり  
殿様江戻し上られ候もの、たゞせつ

なる者の二種

われ一者をやく入し御事はくやくの世に相成つかなく  
おもひ候二付「心付申候事はくへ」と複数二か、セ申候、  
そのうち其が能むべく候ふく「へへ」とのちも持つべ  
せめて二十ばかりまでやれ一なかからくる申候く、  
家のためやめしだゆじゆめの候くいが、やへとやへて  
やうのなりひなれ、セカリ得せば是事、やへせんやへ  
いたし候く、此文中致候くべどもわれ候なれが事  
にかまつけをセ申候、やへ又やね一なくなり候く、  
画御本よりの御ひからわがくだり、一やく方はしゆがお  
うのゆの共せておもひ入ゆけやんくわから候くそりれ  
の川せりかへり申候、やれ一く縁りぐる故此家之御  
御ひ、物の経過しなる川壁、やへ其處へ木へ木へ壁  
も相かわらず右の御壁しおしやわら坂様二御壁、その原  
くお申がく申候、われいわかつくべの事へはかりかた  
く候。

一、輕人・内せんかうけんにて物事がれらゆたんへあるま  
しく候、とりわけ内せん御事心をしもやかき者にて、  
われ／＼事わりこの外大せつかり、心入なる御事共ま  
んそくいたし候、ねん比に御おもひ給候べく候  
一、黒川旅祝事、おややから年久しく当地ニつめ、われら  
下向の時分も道中までむかいにも下され候、御留主年

へおややから一人にてひむる、われ一事せわになり、  
女は「くわね」やめことかつけもだの「申候」今の  
やからせだねかへ候くじめ、もへひむる、しごれが  
てつじむ申候所に、中間のもの共とあひ申れぬをす  
に「く」やく繕御ゆんねから申候、出そんし入へし  
おお御ゆんかうわが、やめしのそははなれすありたて  
申候心入にて候くじめ、がくしれ御ゆる者にそはに  
かしらかうじぬせんれいと申事故、われへたつ  
てじも申かなく、その通ニシテしおも候、やからおお  
ひ入ニヘ御せんたりへからう共とれへも御心にか  
ななわす御うだからうじめ、からう共との御間ものし  
成事共にて候故、れやうになおやうに、からうはじぬ  
かうう共に御しひ御ゆく、やくかうしんばけ相つ  
じめだてまつり候やう二教度心の心へ、われへそへ  
そへしより候くじめ、おもて向の幕しおの守殿・から  
う共そつだんもじだし候事、女のれし出がまし事ハ  
申されず、ちせつも候へんと存候て、ねがいのせつも  
じ、め申せず、その通に致おも候、人のつらしあひけ  
るはくからうの者、すし成心入の者とわれへそへし  
候事、やめしやう人の後やからも年かましくから  
申候事、心やすし万事用事御申つけ、そつだんのあ  
にてにあむられ候くかししそへし候、そもし事大、や  
つの事何ニヤキヘやむやせしへ候くじめ、なき物へち  
しんの人にて候、からうのもおが家のだからにて候、  
そへへ人を御らん候へく候  
おりやへ土佐事、御せんだににくしおれやく相つじめ、  
われへもあら申候、それより備やくもなく候、外の  
からうじもく地をくも教候が、ひれへくもやへぬな  
く候、是れがゆにそへしし人かひじくも、相する候く  
りの、くわし事へそへし候、やくつらり、ゆみ  
すうすうややんならの物ひゆく、しわき事の「心ひき」  
からうじもよやくわがれがゆうそへり「く申候」  
しわき事はかりだぬる物にてなく、当時はあんなら  
う物はからくへの事へくじく候、國家をだらかにい  
じむるからうねもへへ御見たてあるくも事にて候、  
国家をやわらか事ゆくへじかくりにけん様御ゆく  
くも心に御かけ、おなはすながらうねへ一心に御が  
に候くかしと存候

九月十八日の夜

「せんそ大事ニ御まつり、仏道しへ／＼御心かけ候、  
とかくじひやかく下々までおもへ御ゆく／＼なれ候  
「十七八年の御なり候へ、」ぶんぶんのとりく／＼有へ  
候、いつ方より御むかへ候とも、御むかへじ／＼なれ候、  
きにいらぬ事も御を候へ、」やうやく／＼しつき  
／＼の年より共く御申つけ、心／＼御やく／＼な／＼多く方  
を大せつ／＼むつましくなれ候が家はんしやうのゆじ  
にて御を候、振又ほつゝ人を御つから候とも、むさ  
といだしたる者がならず／＼御無用にて候、すしめ  
たしき人を御かへ、國にて御たのし／＼候へく候、  
すしゅらいやしを者すべへ／＼すじゆらても候てか、た  
ぬあしき事に候ま、」われひいたしたる者へがならず  
／＼御無用ニ存候、近年大名方だんめいニ身もかわし  
き山ひわだいかほじかき、おもひ候、」大／＼やうにて  
物事がゆふニまかせ、るん酒の／＼つニ御まつり候ゆく  
／＼のかみみぢかく／＼せけんのとなくおもろしからす候、  
われ／＼そくオリて／＼申候へ、」たぬあしき事へすらふ  
ん申ふくめ候へんか、われ／＼ふ申やくめ候へ、外ニ  
ちかしきしんるい方へなく、地井へせりらつ／＼お御な  
りだにに候へんかどりれの／＼／＼心元なく存候、いら  
ぬ事ながらかまつけるを申候ま、」われ／＼わゆニ申  
と御おもひ、われ／＼／＼のかつ／＼と御おもひ候て、  
御身大せつ／＼長命家はんしやうたの／＼入候、是何より  
のから／＼／＼そんじ候

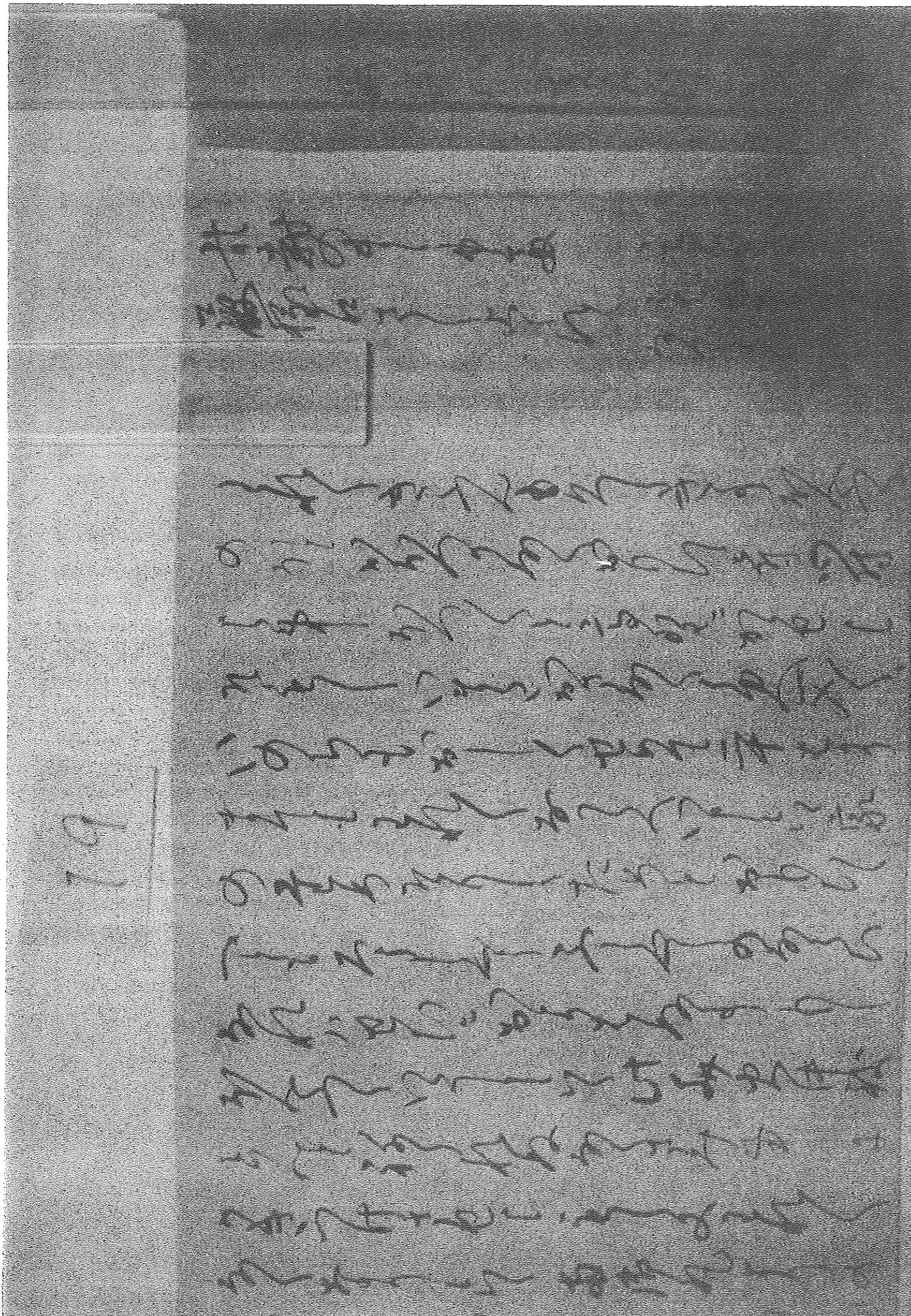
「われくめしつかく候者とも、京より召つれ候年齢共  
はしめ、これくと御ふひくかりたの申候、その原  
初たの申候、とかだ事へかうの者にて子じもわあ  
り、すべのきつかいなく候、たゞの事われく京より  
めしつれ候者にて、子じもわつかにかうしや、そもし  
たんしゃうよりつけおき申候、われくめかねのとお  
り、そもしきちくありそだてせい人ぬされ候、八才よ  
りてならひ物もせしにそだて申候、そも上事すべ  
れたる生つきゆく、おんめうになまやうにかくもん心  
かけ申され候やうにいたしだきとして、きけんよりせい  
二人申候、すいふんくがくもん御心をよせられ、  
古人のおしへを御まなび、國家を御おさめ候く候、  
ぢやんのりはつはかりにては國家のせうとうくおら  
ぬ御事もも、およひ候、たゞの事わけてたの申候、  
いやおじやうし御申つけ、じこより候てすべく御  
させ給候く候

月二十六日夜

「われへ一れいの事わだの『申候』申べくおどり候へれ  
共、おかれ世山申われへ一やへのおやうだら兵部卿  
宮おがほかりにて候、われへ一やへらの内へ何かに  
心ねむつけしやし候くひも、われへ一めしむなり候  
へ、御おからなく御しゆじ候くひも、われへ一に御  
なりかおりねん出しおわれ御上だの『申候』おひるへ  
らゐだかく候くひも、おもやうかかへ、やのうかかう  
へんくの御つけとけにて御なぐもありだひへねた  
り、ある母懸掛へ、やめさせら人のうくへ御心つけ御  
上だの『申候』申懸事つゝ山候くひも、人ぬしひひ年  
より共におやへし、萬葉はやうしが、也、虫文もやけ  
てした、おれせ申候、われへ一れやくへれしてねへ  
もなく、かやうの尋みりの『て』おやうのれ申れを候  
くひも、とかくしむ事や・掛や、おからなくらが心  
あがいて候、わく『申候く、れひから虫文もやけ

九月二十九日 夜

(月照寺文會 A一九一)



文46

## 53 年末辭 家中食宿につき天岳院より御書を

御たつねの御おもき

宮様御たつねあそへされ候へ、去年御園虫つき候付御し  
ばい御れしつじら大おだなりせられす候ゆく、御家中の  
御手あてあそへされかだく、それに付御園しづき御家  
者・おもて御家老申あわせ、そつたんのうへ宮様御聞あ  
そはし御くらふに覺しめし候、上にう至極の御けんやく  
あそへされ候間、御家中未々まで何とぞ來秋迄ひりつ、  
き候やうにとの御傳つけられ候もし、御家中へ御仕置の  
めんへより申渡し候もしくわしく遣付達出し御らんあ  
そへされ候、もつじめなる事にござり石候くどか、かね  
て經人・九郎兵衛づけ治候じおり、御本丸より上意のる  
もむちも候ゆく何事にむかず御おもて面御からまあるそへ  
されおる御心にて御をなされ候所ニ、一おううかひる  
なく申渡し候事こそつ千方百なる體ニ覺し召候、殿様御た  
めへあちらん、御がちつためにあになり候へ、いかやう  
にも申わたしむろしま事ニ候へとも、万々一御本丸へ相  
きり候へは宮様じとの外なる御めじわく仰わけられる  
御をなき事共ニ覺しめし候、お候へ殿様の御ためにも  
よろしからず、何から何までじりく御くらしく覺しめ  
し候、さためてきわめ・九郎兵衛方よりおど・し上意の  
段へ御園ぐる申つかはすくき事に思召候、又へ申しつか

べたす候や、此取扱やしに實しめし候、それ並而人へ  
傳尋るそへされ候間、これゑ申上くおんの御意に御る  
候、けいれら御園御目附も御人候へハース／＼宮様御な  
へきじか斗に恩召候、かれこれもつて右之御たつねに御  
き候、以上

正月

瀬山

その原

右御書付正月十五日右面人より受取之

(乙部家文書八一九三)

## 【史料7】「松江瀬江戸御用状留」

一、十月廿二日詔町便十一月五日届

(中略)

一、同日齋藤丹下被申願候へ、殿様御幼年被成御座候付唯今之内奥ニ被為入候、仍  
先近年之内へ御次辺別紙之通可相勧旨書付候相渡之

但 佐藤登三郎安達三郎付御書付

## 【史料8】「松江瀬江戸御用状留」

一、同廿一日官様昨日御摘髮被為成

天岳院様与御名被為附候、然共御家中ニ而ハ唯今迄之通官様与可奉唱旨、此段御用  
人以下へ可申談旨ニ付及通達